

【資料】

文教大学人間科学部学生(4年)の 就職に関する意識について

上 杉 喬

はじめに

ここ数年来、人間科学部学生の進路指導を担当して来たが、その中で、感じている最大の問題点は、学生の進路志望先が、実際にはその可能性の少ない教員および公務員が多く、反対に、実際にはその可能性の大きい民間企業が相対的に少ないことである。そしてそれに次ぐ問題は、民間企業を第1希望とする者も、第2希望とする者も、いずれも、就職活動への取り組みの遅いことである。

本調査は、人間科学部の進路指導をいくらかでも前進させるために、まず、4年生の新学期を迎えた時点での学生の就職・進路に対する意識状況を把握し、就職・進路の決定状況を中心として、それに影響するいくつかの要因について考えようとするものである。

方 法

1. 調 査 票

2つの調査票を使用した。1つは、『就職・進路に関する意識調査』(付表)で、今回あらたに作成したものである。もう1つは、『イメージ調査』(大学生用)である。イメージ調査(法)は、上杉(1979)が、感情的イメージの測定のために開発したもので、これまでのいくつかの研究(上杉, 1979, 1981, 1983)

によって、諸対象に対する感情的イメージを「感情価」として、マイナス感情・プラス感情の軸上において、安定的に数量化できることが明らかにされているものである。

2. 対 象 者

文教大学人間科学部4年生、男子71名、女子60名、計131名。対象者の専修別および高校卒業年度区分別分布は、表1のとおりであった。

表 1 調 査 対 象 者

		専 修 別				
		心理学	社会学	教育学	人間学	計
性別	男	18	10	21	22	71
	女	23	6	17	14	60
高 卒 年 度	S 55以前(浪人)	23	6	9	10	48
	S 56年(現役)	18	10	28	25	81
	不 明			1	1	2
全 体		41	16	38	36	131

3. 実 施 年 月 日

1984年4月6日。文教大学6号館624教室において、4年生の進路ガイダンスの席上にて、集団調査として実施した。

研究 I : 就職・進路に関する意識調査

1. 目 的

従来人間科学部4年生は、進路指導を担

当している実感として、あまり就職活動に熱心ではなく、不活発に感じられるものであった。とくに、それは、民間企業に対する学生のアプローチに顕著であった。この原因は、どこにあるのだろうか。

全く当然のことであるが、就職活動に具体的に取り組むためには、就職・進路の希望先が、具体的に決まっていなければならない。本調査では、まず、4月時点で、どのくらい、就職・進路希望が具体的に決まっているのか

を明らかにし、その上で、それを決定するのに影響を与えているものについて考察するものである。

2. 就職・進路先の決定状況

表2は、問3「今現在、具体的に希望する就職・進路先が決まっていますか」に対して、はい(=決まっている)」と「いいえ(=決まっていない)」を、全体およびいくつかの属性または特性に関してクロス集計したものである。

表2 問3具体的な就職・進路先の決定状況(人数)

		決ま って いる	決ま って い な い	計			決ま って いる	決ま って い な い	計	
全	体	61	69	130	問6-1	民 間 企 業	10	29	39	
性 別	男	42	29	71	希望業種(第1希望)	公 務 員	12	17	29	
	女	19	40	59		教 員	29	10	39	
専修別(全体)	心 理 学	16	24	40		福 祉 等 非 営 利	5	8	13	
	社 会 学	8	8	16		大 学 院	4	1	5	
	教 育 学	22	16	38		不 明	1	2	3	
	人 間 学	15	21	36		営 業 ・ 販 売 関 係		3	3	
専修別(男)	心 理 学	9	9	18		問6-2	事 務 関 係	8	14	22
	社 会 学	5	5	10		希望業種(第1希望)	技 術 関 係	1	2	3
	教 育 学	17	4	21			サ ー ビ ス 関 係	2	12	14
	人 間 学	11	11	22			マ ス コ ミ 関 係	4	6	10
高 校 卒 年	S 55 以前(浪人)	23	24	47	教 員		29	10	39	
	S 56 年(現役)	38	43	81	心 理 関 係 専 門 職		5	4	9	
大 学 選 択 基 準	学 校 の 知 名 度	0	0	0	福 祉 関 係 専 門 職		3	11	14	
	学 校 の 雰 囲 気	3	2	5	研 究 職(大 学 ・ 研 究 所)		1	2	3	
	偏 差 値	2	3	5	そ の 他		3	1	4	
	勉 強 し た い 学 部 が あ る	39	60	99	職 種 は な ん で も よ い		1	1	2	
	周 囲 の 意 見(教 師 ・ 親)	4	1	5	決 め ら れ な い		3	2	5	
	地 理 的 条 件(通 学 等)	3	1	4						
	就 職 を 考 え て	10	2	12						
	そ の 他	1	1	2						
問 5 就 職 を 考 え は じ め た 時 期	中 学 時 代 か ら	5	1	6						
	高 校 受 験 時 か ら	3	1	4						
	高 校 在 学 中	10	4	14						
	大 学 入 学 時 点	19	18	37						
	最 近 に な っ て	22	39	61						
	ま だ 具 体 的 で な い	1	5	6						
	全 く 考 え て い な い	1		1						

ここから、まず第1に、4年生の4月時点において、「決まっている」とする者が全体の46.6%で半分以下であり、「決まっていない」者が、無回答1名を加えれば、全体の53.4%に達していることがわかる。

これを、希望業種(第1希望)で見ると、教員志望者では「決まっている」が74.4%、大学院進学希望者では80%で進路決定者が多いが、その他では、いずれも、進路未決定が

多数を占め、進路決定者は、公務員志望者では41.3%、民間企業希望者はわずか25.6%となっている。教員志望者は、「決まっている」者が約3/4となって多数を占めてはいるが、調査時点（4月）の後、わずか3ヶ月余で採用試験であることを考えると、教育学部などに比べ、格段に差があるといわざるを得ない。また、公務員志望者も採用試験は7月であり、進路決定者40%強は、4月時点の進路決定率として、非常に問題であり、かなり低いレベルと考えざるを得ない。

以上から、全体として言えることは、志望先業種に必要とされる条件をも含めて考えるならば、人間科学部4年生の希望する就職・進路先の決定が、非常に遅れているということである。

3. 就職・進路の決定・未決定におよぼす諸要因

どういった要因が、就職・進路を決定するために重要なのであろうか。これを十分に明らかにするためには、他大学の学生を含めた包括的な調査研究が必要であるが、ここでは、本調査の限りで、検討してみたいと思う。

【性差について】一般に、男子と女子では、就職に対する構えや意識にちがいがあってもまた指摘されるところである。表2から、就職・進路希望の決定者は、男子では59.2%、女子では32.2%となっており、男子に比べ女子の未決定者の比率（67.8%）の高いことがわかる。また、 χ^2 検定の結果は、0.5%水準で男女間に有意差のあることを示した。これらの結果は、就職・進路希望の決定において、男女間に意識のあることを示すものである。

【浪人と現役】表2には、高校卒業年度で見ても、昭55年以前の者と昭和56年の者とを比較してみた。この区分は、必ずしも、浪人と現役の対比に一致するものではないが、おおよそ一致を示すものである。

一般に、浪人は、年令が高いために、社会的成熟も高く、就職・進路などでも、それなりの明確性を持っていると考えられる。しかし、表2の結果は、人間科学部においては、

就職・進路希望の決定において、浪人と現役に差がみられず、その効果をもっていないことを示していた。

【大学選択の基準】大学の社会的役割のひとつには、大学教育を通して、社会的に有用な人材を育成することが挙げられる。これは、専門的職業教育ではないとしても、学問分野（学部）に応じた職業人を育成するという役割である。

事実、理工系学部と文科系学部とでは、一般にはその卒業後の職業人生は大きくちがってくる。その意味では、大学受験生の学部選択は、大学卒業後の職業人生をある程度考えてのものである方が望ましい。

表2の「大学選択の基準」で見ると、人間科学部学生（4年）では、「就職を考えて」とする者は、わずか9.2%であり、最も多いのは、「勉強したい学部がある」の75.6%であった。大多数の学生が、大学卒業後の人生についてあまり考えることなく、その時点の興味を中心に人間科学部に入学したことがわかる。

この「大学選択の基準」を、「就職・進路」の「決定者」、「未決定者」についてみると、「勉強したい学部がある」とする者の60.6%が「未決定者」であり、「決定している」者が最も多い（83.3%）のは、当然のことながら、「就職を考えて」大学を選択したものであった。これは、全体として、5%水準で有意（ χ^2 検定）であったが、さらに、表2のこの結果を、「勉強したい学部がある」と「それ以外」に区分し、「決定・未決定」との間の2×2の χ^2 検定をしたところ、0.5%水準で有意差が見られた。

これらの結果は、大学卒業後の人生を考えずにその時点の興味を中心に人間科学部へ入学した学生の多くは、学部の3年間を経過した後も職業生活への視点を持ち得ていないことを示すものである。

この結果は、早期の就職・進路希望の決定のために、大学受験時点での選択基準の重要性を示すとともに、人間科学部の3年間の教育が、彼等に職業人生への視野を与えていないということを示唆するように思われる。

【専修選択との関係】専修選択もまたその後の職業人生に大なり小なり関連するものである。表2の専修別の結果から、専修選択と就職・進路希望の決定との関係をみると、“決まっている”者は、教育学（58%）、社会学（50%）、人間学（42%）、心理学（40%）の順に下がっていくが、 χ^2 検定の結果は、10%水準でも有意性は示さなかった。また、これを男子だけで見ると、教育学だけが“決まっている”

80.9%と高いが、他の3専修では差は全くなかった。この教育学専修男子の“決まっている”17名のうち12名は教員志望であり、このことを考えに入れれば、男子においては、専修選択と就職・進路希望の決定には特に関連がないといえる。

人間科学部の学生の、専修選択は、卒業後の進路決定・未決定とは直接的には関連していないようである。

表3 就職を真剣に考えはじめた時期（人数）

		中学時代から	高校受験時から	高校 校中	大学入学時	最近になって	まだ具体的でない	全く考えていない	合計
全	体	6	4	14	37	62	6	1	130
性別	男	2	3	9	22	30	4		70
	女	4	1	5	15	32	2	1	60
高校卒年	S 55 以前（浪人）	1	2	5	14	22	3	1	48
	S 56 年（現役）	5	2	9	23	40	2		81
専修別	心理学	1		5	9	22	3	1	41
	社会学			1	4	10	1		16
	教育学	2	1	7	13	13	1		37
	人間学	3	3	1	11	17	1		36
問2 大学の選択基準	学校の雰囲気				2	3			5
	偏差値				1	1	1		3
	勉強したい学部がある	5	3	11	30	45	5	1	100
	周囲の人の意見(教師・親)	1			1	3			5
	地理的条件					4			4
	就職を考えて		1	3	3	5			12
	その他					1			1
問6-1 希望職種 ()=進路内数	民間企業		1(1)	2	11(5)	23(4)	2		39(10)
	公務員			3(3)	9(4)	16(5)	1		29(12)
	教員	6(5)	3(2)	7(6)	10(7)	12(9)			38(29)
	福祉・非営利			1	5(2)	7(3)	1		14(5)
	大学院			1(1)	2(1)		1(1)	1	5(3)
問6-2 希望職種 (進路)	不明					3(1)			3(1)
	営業・販売					3			3
	事務関係			2	7	12	1		22
	技術関係				1	2			3
	サービス関係				4	8	2		14
	マスコミ関係		1		2	7			10
	教員	6	3	7	10	12			38
	心理関係専門職			3	3	3		1	10
	福祉関係専門職			1	6	6	1		14
	研究所(大学・研究所)				1	1	1		3
その他			1	1	2			4	
職種は何でもよい				1	1			2	
決められない					5			5	

【就職を考えはじめた時期との関連】就職・進路希望を決定するためには、社会的諸条件および主体的条件などについて、十分に考える必要がある。そのためには、考えるための期間も必要である。比較的早くから考えはじめた者は、それだけ早く決定することができるであろう。

「いつごろから、自分の就職について真剣に考え始めたか」では、“最近になって”とする者が46.6%で一番多く、次いで、“大学に入学した時点”の者が28.2%であった。また、“高校在学中”以前の者も18.3%にのぼっているが、反対に“まだ具体的に考えていない”や“全く考えていない”とする者も5.3%であった。

①この「就職を考えはじめた時期」と「就職進路希望の決定」との関係は、“高校在学中”以前の者では、“決定している”は75%に達しているが、“大学に入学した時点”の者では“決定”と“未決定”が半々になり、“最近になって”以降では、“未決定”(64.7%)が“決定”(37.3%)の倍近くになっている。

この結果を χ^2 検定したところ、3%水準で有意差が見られた。「就職を考えはじめた時期」と「就職・進路希望の決定」には関連があり、“最近になって始めて具体的に”考えたのは遅く、“高校在学中”からが望ましく、少なくとも、“大学に入学した時点”から考えることの重要性を示すものである。

②表3は、「就職を真剣に考え始めた時期」と諸要因の関連を見たものである。

まず、性別では、男子の方が女子よりも、早くから「考え始める」傾向が見られるが、有意差は見られなかった。

また、「専修選択」との関連では、“教育学”を選択した者が、他の専修に比べ、“大学に入学した時点”以前の者が多い(62.2%)。このことは、就職を考え(特に教員志望)た者が、“教育学”を選択したことを示している。

「大学選択の基準」との関連では、前述した「就職・進路希望の決定」とはちがって、“勉強したい学部がある”と“就職を考えて”

とでは、「就職を真剣に考え始めた時期」にちがいは見られない。

これらの結果は、「就職を真剣に考え始めた時期」が、他の諸要因と相対的に独立したものであり、それだけ一層、これが「就職・進路希望の決定」にとって重要であることを示すものである。そして、このことに関連して考えなければならないのは、「大学選択の基準」として、“勉強したい学部がある”として人間科学部に入学した者のうち51名(51%)の者が、“最近になって”「就職を真剣に考え始めた」者だということである。大学教育が、学生を社会人として卒業させるという役割をもつものである以上、人間科学部の教育を通して、もっと早期に「就職を真剣に考える」ような教育的アプローチが必要に思われる。

【就職に対する学生の意識】就職に対してどのような意識を持っているかは、学生の実際の就職活動において、大きな影響を与えるものである。

表4は、就職に関するいくつかの質問に対する5段階評定(1~5点)の結果を平均点で示したものである。

①これを、「就職・進路希望の決定v.s.未決定」との関連で見ると、まず、「自分の職業・進路適性を理解している」ことが重要であることがわかる。「就職・進路希望の決定者」では、よりよく“理解している”ということであり、一元配置の分散分析の結果、0.1%水準で有意であった。

また、この「職業・進路適性の理解」を、「就職を考え始めた時期」別に見ると、“大学に入学した時点”以前の者と“最近になって”以降の者とで、明確なちがいのあることもわかる。「職業・進路適性の理解」は、自分の諸特性・特徴の理解とともに、さまざまな職業についての理解を前提とするものであるから、早くから準備をしていない者が、“理解していない”に近くなるのは当然である。

②「就職・進路希望の決定・未決定」で次に大きな差のあるのは、「自分の就職について深く考えているか」である。この質問項目も、一元配置の分散分析の結果、0.1%水準で有意

表 4 就職に関する意識

	全 体	性 別		問3 就職・進路決まってるか		問 5 就職を考えはじめた時期							
		男	女	決まってる	決まっていない	中学時代から	高校受験時から	高 校 中 在 学 中	大学入学時 点	最近 になって	まだ具体 的でない	全く考え ていない	
問7 就職に関して	10-a 職業・進路適性の理解	2.65	2.48	2.85	***2.13	3.10	2.33	1.75	2.43	2.24	2.95	3.33	5.00
	7-b 就職を考える時(快-不快)	3.92	3.76	4.12	***3.67	4.14	4.17	3.50	3.86	3.89	3.97	4.50	3.00
	7-a 就職について深く考えるか(深・浅)	1.96	1.73	2.23	***1.61	2.29	2.17	1.50	1.64	1.59	2.03	4.00	5.00
	10-b 就職・進路での親意見の尊重	2.98	2.96	3.02	*2.75	3.17	2.67	3.00	2.86	2.92	2.95	3.83	4.00
	7-c 就職は人生で重要か	1.35	1.27	1.45	**1.16	1.52	1.17	1.00	1.21	1.24	1.47	1.67	1.00
	10-c 新聞の求人広告欄見るか	2.73	3.04	2.37	2.74	2.70	3.33	3.75	2.21	2.38	2.79	3.67	5.00
	10-d 就職情報誌見るか	3.11	3.28	2.92	3.07	3.16	3.00	4.00	2.86	3.03	3.02	4.17	5.00
	10-c 専門科目は職業に生かせるか	2.25	2.11	2.42	***1.92	2.55	1.83	1.50	1.50	2.14	2.55	3.00	1.00
10-f 就職・進路で人科でよかったか	2.32	2.34	2.30	*2.13	2.51	1.50	1.75	1.93	2.22	2.58	2.83	1.00	
問8 何のために働くか	a 自分の能力発揮と自己実現のため	1.57	1.55	1.60	1.43	1.71	1.33	1.25	1.29	1.49	1.68	2.33	1.00
	d 社会のためになるから	2.52	2.41	2.65	2.26	2.72	2.83	2.25	2.50	2.14	2.68	3.17	4.00
	c 収入を得るため	1.60	1.70	1.48	1.61	1.59	2.00	1.50	1.64	1.59	1.48	1.50	4.00
	f 食べるためには仕方がない	2.66	2.75	2.55	2.90	2.45	3.33	3.00	3.79	2.57	2.37	1.83	5.00
	e 人間の義務だから仕方がない	3.41	3.34	3.50	3.46	3.35	3.68	4.25	3.86	3.24	3.34	3.50	5.00
	g 皆が働くので働く	3.85	3.90	3.80	4.05	3.67	4.50	4.50	4.14	3.75	3.76	3.33	5.00
	b 働くことで偉くなるため	3.60	3.45	3.78	3.48	3.70	4.50	3.50	3.50	3.35	3.68	3.33	5.00
問9 就職の手段として有効か	a 学科の成績	2.59	2.61	2.57	2.66	2.52	2.83	2.50	2.57	2.65	2.63	1.67	4.00
	b 会社訪問	1.49	1.70	1.23	1.54	1.45	2.00	1.75	1.57	1.30	1.44	1.83	1.00
	c コ ネ	1.61	1.66	1.55	1.77	1.48	2.00	2.25	1.36	1.49	1.65	1.33	1.00
	e 資 格(珠算・簿記・免許)	1.79	1.90	1.67	1.92	1.70	1.83	1.75	1.93	2.05	1.61	1.83	2.00
	f 容 姿	2.95	3.13	2.75	3.16	2.75	3.50	3.25	3.00	3.14	2.81	3.00	2.00
	d 個 性	1.44	1.49	1.37	1.40	1.48	1.33	1.50	1.43	1.38	1.48	1.67	1.00
	g サークル活動(体育系)	2.28	2.31	2.25	2.28	2.29	2.33	2.25	2.21	2.32	2.26	2.67	2.00
	h サークル活動(文化系)	2.62	2.61	2.63	2.57	2.67	2.83	2.25	2.64	2.76	2.50	3.00	4.00
人 数(人)	130	71	59	61	69	6	4	14	37	61	6	1	

(注) *5%、**1%、***0.1%

であった。「就職・進路希望の決まっていない者」も、2.29であり、考えていないのではなくそれなりに考えているのだが、決まっていないのに、この時点でまだ十分「深く考えていない」というのは問題である。これもまた、「就職を考え始めた時期」の早い者の方が、「深く考えている」傾向が強いが、ここでは、「中学時代から」の者が、「最近になって」の者よりも「深く考えていない」こともまた、目につく。

③以上は、就職に関する本人の構えとでもいえるものであるが、「就職のことについて考えると快か不快か」、「学部で勉強（専門科目）していることがつきたい職業に生かせるか」、「就職は人生において重要なことだと思うか」など、就職に対する意識もまた、「就職・進路希望の決定」と関連をもっている。これらは、いずれも、一元配置の分散分析の結果、1%水準の有意差をもつことを示していた。また、これらの事項も、「就職を考え始めた時期」とも関連を持っている。

しかし、ここで問題だと思えることは、「就職・進路希望」の「決まっている」者でも、「就職のことについて考えると」「不快」に近い(3.67)ということである。これは、表8で見てもわかるように、どの業種、どの職種を希望している者にも共通しているのである。一般に、われわれは、「不快」なものは、できるだけ避けたいものである。「就職イコール不快」ならば、モラトリアムを抜け出て、職業人生を迎えるために就職活動に立ち向かうのはむずかしい。

④なお、「就職・進路希望の決定」に関して、男子と女子に有意なちがいが見られたことは前述したが、表4でみるように、「就職・進路希望」の「決定者」と「未決定者」に有意な差の見られた事項に関して、男子と女子に一定の差のあることがわかる。すなわち、女子では、「職業・進路適性の理解」度が低く、「就職について考えると不快」になり、「人生における重要」度もやや低く意識されており、また、「学部で勉強していることが職業に生かせる」と「思わない」と考える傾向が強い。前

述の〔性差〕の内容はこれだけではないと思われるが、これらのこともまた、男子とのちがいをもたらす要因であろう。

【ま と め】「就職・進路希望の決定」に関連する要因としては、

1) もっとも重要なものは、「就職を考えはじめる時期」である。少なくとも、「大学に入学した時点」から取り組むことが大事である。

2) これに関連して、「大学選択の基準」として、就職・進路をも念頭に入れたものであることも大切である。

3) また、現状の人間科学部学生では、「勉強したい学部がある」を「大学選択の基準」として入学した者が多い。従って、大学教育において、就職・進路決定を促進する配慮が望まれる。

4) 「職業・進路適性の理解」をはじめとして、就職に対して学生の抱く意識も、進路を具体的に決め、就職活動に立ち向かう上で、重要である。特に、就職に対して「不快」感を感じている現状は問題である。

4. 希望する業種と職種—その特徴—

表5は「希望する業種」であり、表6は「希望する職種」である。「希望する業種」では、第1希望を1つ、第2希望は2つ以内選択したものであり、「希望する職種」では、第1希望・第2希望ともに1つ選択であった。

【希望する業種とその特徴】

①希望する業種を大きく民間企業・公務員・教員・福祉等非営利の4つに区分してみると、第1希望では、第1位が民間企業(29.8%)および教員(29.8%)、第3位は公務員(22.1%)、第4位は福祉等非営利(10.7%)であった。ほかに、大学院進学希望(3.8%)があり、不明および無回答は3.8%であった。ここで、まず特徴的なことは、教員・公務員・福祉等非営利など、社会的労働における分業から見てサービスの活動分野への希望者が全体の62.2%に達し非常に多いことである。これに反し、社会的労働における生産活動を分業する民間企業への希望者はわずかに3割にも満

表 5 希望業種（進路）

区分	業種	第1希望			第2希望			合計			区分	業種	第1希望			第2希望			合計		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計			男	女	計	男	女	計	男	女	計
製	食品				1	4	5	1	4	5	レジャー産業	観光	1	1	2	5	1	6	6	2	8
	化学											旅行		4	4	4	6	10	4	10	14
	繊維	1	1		1	1			2	2		娯楽設計				1	3	4	1	3	4
	鉄鋼											ホテル		1	1					1	1
	自動車機械					2	2		2	2		食堂									
小計										小計	1	6	7	10	10	20	11	16	27		
造	電気機器				1		1	1		1	金融	銀行				1	2	3	1	2	3
	その他製造	1	1	2	2	3	5	3	4	7		信用金庫				1		1	1		1
小計		1	2	3	4	10	14	5	12	17	損害保険										
建設	建設	1	1		1	1			2	2	融	生命保険									
	設計事務所											証券				2	2		2	2	
	設備工事関係											小計				2	4	6	2	4	6
小計		1	1		1	1			2	2	企業計	11	28	39	60	60	120	71	88	159	
その他企業	コンピュータ関係	1	2	3	2		2	3	2	5	公務員	国家公務員	3	2	5	4		4	7	2	9
	不動産											地方公務員	15	8	23	14	3	17	29	11	40
	運輸											団体職員	1		1	3		3	4		4
	電気・ガス				1	1	2	1	1	2		公務員計	19	10	29	21	3	24	40	13	53
	その他	1	4	5	2		2	3	4	7		教員	幼稚園・保育園		1	1					1
小計	2	6	8	5	1	6	7	7	14	小学校教員	15	8	23	1	5	6	16	13	29		
商社	総合商社		1	1	3	5	8	3	6	9	教員	中・高教員	9	1	10	7	1	8	16	2	18
	専門商社		1	1	2		2	2	1	3		養護教員	1	4	5	3		3	4	4	8
小計		2	2	5	5	10	5	7	12	教員計	25	14	39	11	6	17	36	20	56		
流通産業	スーパー				2		2		2	福祉等非営利	福祉施設関係	3	3	6	8	11	19	11	14	25	
	デパート		2	2	1	4	5	1	6		7	社会教育関係	2	1	3	11	10	21	13	11	24
	ファッション		2	2	1	2	3	1	4		5	病院				5	8	13	5	8	13
	その他				1		1	1			1	その他	1	4	5	1	2	3	2	6	8
小計		4	4	5	6	11	5	10	15	福祉等非営利計	6	8	14	25	31	56	31	39	70		
マスコミ	新聞	1		1	1	1	2	2	1	3	大学院進学	4	1	5	3		3	7	1	8	
	放送		1	1	3	1	4	3	2	5	不明	3		3	1	3	4	4	3	7	
	出版		6	6	10	7	17	10	13	23	合計	68	61	129	121	103	224	189	164	353	
	広告・宣伝	6		6	11	6	17	17	6	23											
	調査研究				4	8	12	4	8	12											
小計	7	7	14	29	23	52	36	30	66												

たない。これを日本の産業別就業人口（総理府統計局，国勢調査報告）にもとずいて左記4つの区分に該当する就業人口を100として計算すると，1980年では民間企業の実業人口比は89.9%，教員・公務員・福祉等非営利の実業人口比は8.8%であった。人間科学部学生（4年）の第1希望がいかに片寄ったものであるかがわかる。

②また、「希望する業種」を第1・第2希望の

合計で見ると，1位は民間企業の45.0%，2位が福祉等非営利の19.8%，3位には教員の15.9%，4位は公務員の15.0%となる。民間企業希望者は第2希望まで含めても，45.0%で半数にも達せず，教員・公務員・福祉等非営利が半数を超える50.7%であり，ここでも学生の希望が，社会的労働としてのサービス活動の分野に大きく傾斜していることがわかる。

この傾向は、特に男子学生において顕著である。第1希望では、1位教員(35.2%)、2位公務員(26.8%)、3位民間企業(15.5%)、4位福祉等非営利(8.5%)であり、第2希望を含めた合計でも、1位民間企業(37.5%)、2位公務員(21.2%)、3位教員(19.0%)、4位福祉等非営利(16.4%)である。前述の日本の就業人口比に基づいた計算による民間企業89.9%に比べ、男子の民間企業希望者の極端に少ないことがわかる。

③また、民間企業希望者にも特徴が見られる。それは、第1希望で見て「マスコミ関係」(35.9%)に希望が集中し、これに「レジャー産業」(17.9%)が次ぎ、この2つの業界で5割を越えることである。「金融関係」の希望者は0であるが「流通産業」(10.2%)と「商社」(5.1%)および「その他企業」の「その他」(12.8%)をあわせた第3次産業(民間)、すなわち、民間企業のなかでのサービスの活動の分野を希望する者が民間企業希望者の82.0%に達している。「製造」(4.3%)、「建設」(1.4%)「コンピュータ」(4.3%)をあわせた第2次産業部門、すなわち、民間企業における生産活動の分野を希望する者は、18%にすぎない。1980年の日本の就業人口比に基づく計算によれば、上記に対応するサービス活動の分野は49.9%、生産活動の分野は50.1%であるので、ここでも、人間科学部学生(4年)の希望業種の片寄りには明瞭である。第2希望を含めた合計でも、サービス活動の分野が84.9%、生産活動の分野が15.1%となり、第1希望が教員・公務員・福祉等非営利の者のうち第2希望を民間企業にした者が、民間企業の中で、サービスの活動分野に集中する様子がうかがえる。

④このように、民間企業希望者の希望業種はサービスの分野に片寄っているのであるが、この傾向は、男子学生において、特に顕著である。男子学生では、民間企業第1希望のうち、7名(63.6%)が「マスコミ関係」であり、サービス活動の分野が8名(81.8%)を占め、「製造・建設」など生産活動の分野はわ

ずか2名(18.2%)にしかすぎない。これを、第2希望まで含めた合計で見ても、「マスコミ関係」(50.7%)、「レジャー産業」(15.5%)などサービス活動の分野が88.7%、生産活動の分野が11.3%で第1希望よりもさらにサービス活動の分野へ傾斜していることがわかる。⑤表2において、この4つの希望業種(第1希望)が、「就職・進路希望」の「決まっている」者と「決まっていない」者でどうであるかを見ることがができる。

「決まっている」者でみると、第1希望の業種は、1位教員(47.5%)が突出していて、2位公務員(19.7%)、3位民間企業(16.4%)、福祉等非営利(8.2%)であった。「決まっていない」者を含めた全体的傾向よりも、民間企業希望者の比率がさらに低下し、教員・公務員・福祉等非営利の比率が増大していることがわかる。

この4つの業種の中で「決まっていない」者の比率は、民間企業74.4%、福祉等非営利61.5%、公務員58.6%、教員25.6%である。このことは、民間企業を第1希望とする者が、全体として少ない(前述)だけでなく、その中でも大多数の者は、民間企業を第1希望としながらも、実は、明確には「決めていない」という事を示している。また、教員を第1希望とする者を除いて、公務員希望者も福祉等非営利希望者でも、明確には「決めていない」者が、過半数を占めている。ここにもまた、人間科学部学生(4年)の特徴を見ることが出来る。極論するならば、就職・進路のはっきりしているのは、教員希望の者だけであって、公務員や福祉等非営利を希望する者であっても、その過半数は、そして特に民間企業を希望する者では、その大部分が、就職・進路の希望が、この4月時点で明確になっていないことである。就職・進路の明確さから見るならば、『ミニ教育学部』に近いのである。

【希望する職種とその特徴】希望する業種が決まり、希望職種が明確になることが、具体的な就職活動のための前提条件である。まず、人間科学部学生(4年)がどのような職種を希

表 6 希望する職種（職業）

	第1希望			第2希望			合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
営業・販売関係		3	3	5	5	10	5	8	13
事務関係	11	11	22	5	10	15	16	21	37
技術関係	3		3	2	1	3	5	1	6
サービス関係	4	10	14	13	9	22	17	19	36
マスコミ関係	5	5	10	6	5	11	11	10	21
教員	25	14	39	5		5	30	14	44
心理関係専門職	2	8	10	3	1	4	5	9	14
福祉関係専門職	8	6	14	4	8	12	12	14	26
研究職（大学・研究所など）	3		3	6	5	11	9	5	14
その他	3	1	4	4	6	10	7	7	14
職種はなんでもよい	2		2	2	1	3	4	1	5
決められない	3	2	5	2	1	3	5	3	8
計	69	60	129	57	52	109	126	112	238

望しているのかを見てみよう。（表6）

①希望職種を第1希望でみると、1位教員（29.8%）、2位専門職（心理・福祉専門職および研究職）（20.6%）、3位事務関係（16.8%）、4位サービス関係（10.7%）、5位マスコミ関係（7.6%）、6位営業・販売ならびに技術関係（各2.3%）であった。この職種区分に従って、日本の職業別就業者数（総理府統計局）の比率を推定してみると、1980年では、教員の比率は4.0%、専門職・技術関係は11.8%、事務関係30.2%、サービス関係12.2%、営業・販売関係では24.7%となる。こうして比べてみると、教員希望者の比率が非常に高すぎることは、「希望職種」で見たのと同じであるが、専門職・技術関係の希望者にしても、全国的な位置づけからしてやはり高すぎるといえる。これに反して、事務関係の希望者の比率の低いこと、そしてまた、営業・販売関係の極端に少ないことが目立っている。

実際に、文教大学に対する求人から見てもその多くは、営業・販売職種であり、少なくとも現状は、この営業・販売職種への就職の門戸が大なのであるが、人間科学部学生（4年）のこの希望傾向は、就職可能性をせばめることになっている。

②また「希望する職種」を第1・第2希望の

合計で見ると、1位は専門職（心理・福祉専門職および研究職）（22.7%）、2位教員（18.5%）、3位事務関係（15.5%）、4位サービス関係（15.1%）、5位マスコミ関係（8.8%）、6位営業・販売関係（5.5%）であり、第1希望の場合に比べて、教育職の比率が下がり、専門職との順位が入れ替っただけで、全国的な位置づけから見ると、相変わらず、事務職も営業・販売職も、それを希望する者が非常に少ないことが示されている。この営業・販売職への希望の少ないことは、男子学生において顕著であり、第1希望では希望者0で、第1・第2希望の合計でも4.0%にすぎない。

③ところで、これらの職種への希望は、どのくらいしっかりしたものであろうか。

表2で、「就職・進路希望」の「決まっている」者について見ると、第1希望の希望職種は、1位教員（47.5%）、2位専門職（心理・福祉専門職および研究職）（14.8%）、3位事務関係（13.1%）、4位マスコミ関係（6.6%）、5位サービス関係（3.3%）である。そして、各職種において「決まっている」者の比率は、高い順に、教員（74.7%）、マスコミ関係（40.0%）、事務関係（36.4%）、専門職（34.6%）、サービス関係（14.3%）、営業・販売関係（0%）であり、教員を除いて、どの職種でも、その

その希望はしっかりしたものではないことがわかる。また専門職では、心理関係専門職では、55.6%が“決まっている”者であるのに対し、福祉関係専門職の者では、“決まっている”者は、21.4%にすぎず、専門職を第1希望としながらも、十分にかたまった希望とは言えない者の多いことがわかる。

【希望業種・希望職種の特修によるちがい】

①希望業種の特修によるちがいは、表7に見ることができる。心理学専修では、1位は民間企業(37.5%)、2位は教員(20.0%)、3位が福祉等非営利(15.0%)となっている。社会学専修では、1位民間企業(56.3%)であり、公務員・教員は各18.8%となって、社会的分業における生産活動分野を希望する者が他専修に比べてずっと多くなっている。これに対して教育学専修では1位の教員希望が50.0%を占め、次いで公務員(23.7%)であり、民間企業(18.4%)への希望者は少ない。人間学では、公務員希望(37.1%)が1位、教員(25.7%)が2位となっており、公務員希望の多いことが特徴となっている。

この業種(6)×専修(4)の χ^2 検定の結果は、全体として、0.5%水準で有意なものであった。ここで、各セル毎の χ^2 の値を求め、全体としての χ^2 の値を大きくするところを調べてみると、心理学専修では公務員が少なく大学院の多いこと、社会学では民間企業の多いこと、教育学では教員が、人間学では公務員がそれぞれ多いという特徴を示していた。

②希望職種(第1希望)もまた、専修によってちがいがみられる。(表7)

心理学専修では、1位は心理関係専門職(22.5%)であり、2位は教員(20.8%)、3位事務関係(15.0%)となっている。

社会学専修では、1位は事務関係ならびにマスコミ関係(各25.0%)であり、教員(18.75%)がこれに次いでいる。

教育学専修では、1位の教員が50.0%を占め、2位事務関係(15.8%)、3位サービス関係(13.2%)である。

人間学専修では、1位が福祉関係専門職(28.6%)、2位教員(25.7%)、3位事務関係(17.1%)、4位サービス関係(14.3%)とな

表7 専修別の希望業種と希望職種

		心理学専修	社会学専修	教育学専修	人間学専修	全 体
希望業種 (第1希望)	民間企業	15(1)	9(4)	7(1)	8(4)	39(10)
	公務員	4(3)	3(2)	7(4)	13(5)	29(12)
	教員	8(7)	3(2)	19(15)	9(5)	39(29)
	福祉等非営利	6(1)	1	2(1)	5(3)	14(5)
	大学院	4(3)		1(1)		5(4)
	不明	3(1)				3(1)
希望職種 (第1希望)	営業販売関係	1		2		3
	事務関係	6	4(1)	6(3)	6(4)	22(8)
	技術関係	1	1(1)		1	3(1)
	サービス関係	2	2	5	5(2)	14(2)
	マスコミ関係	3	4(2)		3(2)	10(4)
	教員	8(7)	3(2)	19(15)	9(5)	39(29)
	心理関係専門職	9(4)		1(1)		10(5)
	福祉関係専門職	1	1(1)	2	10(2)	14(3)
	研究職(大学・研究所など)	2(1)			1	3(1)
	その他	2(1)		2(2)		4(3)
	職種はなんでもよい		1(1)		1	2(1)
決められない	4(2)		1(1)		5(3)	
計		40	16	38	35	129

っている。

これらは、いずれも、各専修の特色を表わすものであり、この意味では、学生の職業選択において、2年次の専修選択における学生の興味関心の方向と、各専修における2年次以降の教育内容とが、彼等の職業選択にとって無関係ではなく、かなり深い関連をもつものであることを示すものである。どのような学生を養成し、卒業後、どのような職業人生をあゆませるかを視点に入れた教育活動（教授）の重要性を、あらためて知るものである。

【希望する業種および希望する職種と就職に関する意識】表8は、「就職に関する意識」の希望業種および職種毎の平均点を示すものであるが、学生の「就職に関する意識」に、業種や職種によるちがいがあろうか。

①前述したように「職業・進路適性の理解」は、「就職・進路希望」を具体的に決めるに当たって重要なポイントであった。表8からは、教員希望の者がより適性を理解していると考えているのに対し、福祉等非営利を希望する者では、自分でも適性を理解しての職業選択と考えていないようである。これを、希望職種についてみると、福祉関係専門職（人間学専修に多い。表7）がもっともよく自分の「適性を理解している」としているのに対し、心理関係専門職（心理学専修に多い）希望者および営業・販売関係希望者に適性を「理解していない」とするものが多いことがわかる。このことは、福祉等非営利として福祉施設関係を第1希望とする心理学専修の学生が、他に進路として希望する適当なものがないから、親しみのあるこれらの職業を選択したということを示しているのかも知れない。

②「就職・進路希望」の「決定」にとって次に重要なポイントは、「自分の就職について深く考えているか」であった（前出）。この点については、どの業種を希望する者も、それなりに考えているという結果であるが、公務員を希望する者が、相対的に「あまり深く考えていない」としている。これを、希望職種でみると、心理関係専門職と福祉関係専門職を希望するもの

が、「あまり深く考えていない」としている。このことは、公務員希望者で専門職を考えている者が、就職についてあまり深く考えていないことを示すもので、いいかえれば、かなり安易な気持で、とも角、公務員試験を受験しようということのように思われる。

③また、「就職について考えると快か不快か」では、どの業種でも、またどの職種でも、「不快」な方に片寄っている。これは、学生達が、どの業種分野、どの職種を考えても、就職に当たっての困難さを強くイメージしてしまい、あまり明るい展望を持ってないからかも知れない。人間科学部学生（4年）のもつ自信のなさ、コンプレックスを見るような気がする。

④次に、「学部で勉強（専門科目）していることがつきたい職業に生かせるか」であるが、ここでは、希望業種間で、また希望職種間でそれぞれ一元配置の分析分散をしたところ、0.1%水準での有意性を示していた。希望業種では、教員や福祉等非営利を希望するものが、「学部での勉強を生かせる」と考え、民間企業および公務員希望の者が「生かせない」と考えていることがわかる。また、希望職種では、教員・心理・福祉関係専門職を希望する者が「生かせる」と考え、技術関係・マスコミ関係・サービス関係が「生かせない」としている。学生は、「学部での勉強が生かせるか」を考えると、直接的に考え、職業生活の複雑さをほとんど理解していないようである。専門的職種の場合には、たとえば、心理関係でいっても、学部レベルの学力・知識では、とてもそれを「生かせる」訳にはいかないのであるが、そのことを、十分に自覚せず、彼等は「生かせる」というのである。

⑤「就職は人生において重要なことだと思うか」についても、一元配置の分散分析の結果、希望業種間および希望職種間において、1%水準の有意差をもつことが示された。

ここでは、どの業種および職種でも、「重要である」と考えているのだが、希望業種では、民間企業や福祉等非営利への希望者が、やや

表 8 希望業種別および希望職種別の就職に関する意識（平均）

区分	内 容	全 体	希望業種（第1希望）					希望職種（第1希望）									
			民間企業	公務員	教 員	福 祉 非 営 利	大学院	営 業 販 売	事務関係	技術関係	サービス 関 係	マスコミ 関 係	教 員	心理関係	福祉関係	研 究 職	
問7 就職に関して	10-a 職業・進路適性の理解	2.63	2.85	2.62	2.26	2.93	2.80	3.00	2.82	2.67	3.07	2.60	2.26	3.10	2.50	3.33	
	7-b 就職を考える時(快-不快)	3.91	4.03	3.97	3.85	3.86	3.40	*4.67	3.86	4.33	4.43	3.40	3.85	3.90	3.93	4.00	
	7-a 就職について深く考えるか(深-浅)	1.93	1.90	2.21	1.64	1.86	2.60	1.67	1.95	1.67	2.07	1.80	1.64	2.40	2.29	3.00	
	10-b 就職・進路での親意見の尊重	2.98	*3.13	3.00	2.64	3.07	3.40	3.67	2.68	3.00	3.21	3.50	2.64	3.10	3.14	3.33	
	7-c 就職は人生で重要か	1.35	**1.54	1.38	1.10	1.43	1.20	1.67	1.50	**2.67	1.43	1.30	1.10	1.20	1.50	1.33	
	10-c 新聞の求人広告欄を見るか	2.71	2.13	2.59	2.92	3.36	3.00	2.00	2.32	2.33	2.57	2.10	2.92	3.00	2.71	2.67	
	10-d 就職情報誌を見るか	3.09	2.56	3.17	3.31	3.36	4.00	1.67	2.68	2.67	3.43	2.40	3.31	3.50	3.00	4.67	
	10-e 専門科目は就職に生かせるか	2.22	**2.95	2.45	1.74	1.64	1.00	2.67	2.86	**3.33	2.93	3.10	1.74	1.30	1.71	1.33	
	10-f 就職・進路で人科でよかったか	2.29	**2.56	2.52	2.15	1.86	1.20	*3.33	2.59	3.00	2.79	2.90	2.15	1.40	1.79	1.33	
	問8 何のために働くか	a 自分の能力発揮と自己表現のため	1.57	1.64	1.76	1.41	1.57	1.20	1.33	1.82	1.67	1.79	1.70	1.41	1.30	1.64	1.00
d 社会のためになるから		2.51	2.69	2.31	2.31	2.86	2.80	3.00	2.55	2.67	2.86	2.80	2.31	2.80	2.36	2.33	
c 収入を得るため		1.61	1.38	1.69	1.72	1.50	2.20	1.00	1.41	1.67	1.43	1.30	1.72	1.90	1.71	2.33	
f 食べるためには仕方がない		2.67	2.49	2.72	2.87	2.07	4.00	2.00	2.36	2.67	2.21	2.60	2.87	2.90	2.64	4.00	
e 人間の義務だから仕方がない		3.42	3.38	3.21	3.49	3.29	4.20	2.33	3.32	3.33	3.00	3.90	3.49	3.70	3.14	4.33	
g 皆が働くので働く		3.86	3.67	3.57	4.08	3.76	4.80	3.00	3.55	4.00	3.36	3.90	4.08	4.20	3.64	5.00	
b 働くことで偉くなるため		3.60	3.49	3.41	3.69	3.93	3.60	3.33	3.64	3.33	3.64	3.30	3.69	3.60	3.43	4.00	
a 学科の成績		2.60	2.54	2.59	2.67	2.43	3.00	2.33	2.82	3.33	2.29	2.40	2.67	3.00	2.07	3.00	
問9 就職の手段として有効か	b 会社訪問	1.49	1.33	1.66	1.62	1.29	1.40	1.33	1.45	1.33	1.29	1.40	1.62	1.40	1.43	2.00	
	c コ ネ	1.62	1.54	1.83	1.64	1.43	1.60	1.33	1.50	1.67	1.43	2.10	1.64	1.70	1.57	2.00	
	e 資格(珠算・簿記・免許)	1.80	1.74	1.97	1.79	1.57	2.00	1.33	1.73	1.67	1.71	2.00	1.79	2.00	1.93	1.67	
	f 容 姿	2.96	2.74	3.21	2.90	3.14	3.20	2.67	2.91	3.33	2.93	2.90	2.90	3.20	2.93	3.00	
	d 個 性	1.45	1.36	1.66	1.39	1.29	1.80	1.33	1.45	1.67	1.43	1.30	1.39	1.50	1.43	1.67	
	g サークル活動(体育系)	2.28	2.15	2.50	2.18	2.57	2.40	2.67	2.41	2.33	2.21	2.40	2.18	2.90	2.07	2.33	
	h サークル活動(文化系)	2.62	2.62	2.66	2.51	2.86	3.00	3.00	2.73	2.67	2.64	2.70	2.51	3.10	2.43	2.67	
	人 数(人)	130	39	29	39	13	5	3	22	3	14	10	39	9	14	3	

(注) 有意水準 *5%, **1%

その重要性の認識が低い。また、希望職種では、教員および心理関係専門職を希望する者は「重要である」としているのに対し、技術関係の希望者では、その認識がかなりの程度低い。また、営業・販売関係、事務関係、福祉関係専門職でも、その重要性の認識はやや低いことがいえる。就職試験を考えると、民間企業、そしてその中での中心的な職種である営業・販売関係や事務関係を希望する場合、その採用試験は、人物重視、面接重視であることが知られている。そこではもっぱら、人生における職業選択が問題とされる。この傾向は、特に男子において顕著である。その意味では、「就職が人生において重要」という認識の低いことは、採用試験において大いに不利である。

⑥その他の質問項目でも、一元配置の分散分析で5%水準で有意差のあるものが見られる。1つは、「何のために働くか」の中で、「食べるためには仕方がない」とするもので、福祉等非営利においてその意見が目立つ。また、これは、希望職種の営業・販売を希望する者にも見られる。福祉等非営利や営業販売職では、表2に見る通り、4月時点で、「就職・進路希望」の「未決定」が多かった(前出)。社会に出て働くことに十分な意識をもてず、「仕方がない」とする意識が、「未決定」の原因であるのかも知れない。だが、考えるまでもなく、こういう意識の学生が、福祉施設を希望するのでは、問題である。

次に有意差の見られたものは、「皆が働くので働く。」とするものであった。希望職種では、この意見は公務員に多く、希望職種では営業・販売およびサービス関係にみられた。このような意識の公務員であっては大いに困るし、また、営業・販売関係では、このような意識では、現実の厳しい競争社会を生きてゆくことは、むずかしい。

⑦最後に、「就職・進路について考えた場合、人間科学部に入ってよかったか」についても、希望職種および希望職種において有意差が見られている。希望職種では、教員および福祉

等非営利では「よかった」とする傾向があるのに対して、民間企業や公務員では、「よかった」とする者がやや少ない。また、希望職種では、心理関係および福祉関係専門職を希望するものが、「よかった」とするのに対して、営業・販売、技術関係、マスコミ関係では、より否定的である。人間科学部として、「就職にあたっては人科がよかった」といえるものにしたいたいものだと思う。

研究Ⅱ：イメージ調査

1. 目的

イメージ調査は、学生生活における諸対象に対して、どのような感情的イメージを抱いているかを測定することのできるものである。ここでは、対象に対する感情的イメージは「感情価」として数的に表わされるように工夫されているが、対象に対する「感情価」の意味は、たとえば、「私」に対して、プラスの感情価の高いことは、「私」に対して、本人が、(愛)や(喜)や(望)をイメージしていることであり、反対に、マイナスの感情価であれば、それは、「私」に対して、(悲)、(恐)、(怒)、(嫌)などをイメージしていることになる。

また、この諸対象に対するプラス・マイナスの軸上でとらえた「感情価」をもとにして、諸対象間の相関から、諸対象のまとまりをみつけ、それを尺度化するならば、その尺度の特性を代表する感情的イメージによって被験者の特徴を理解することができることになるであろう。

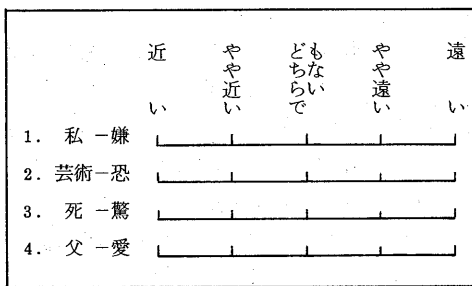
『イメージ調査』(大学生用)は、表9の「感情語」と「対象語」を、表10のように対にして、その「各対について、左側の対象や事象を具体的にイメージしたとき、あなたにとって右側の感情が、「近いもの」であるか、「遠いもの」であるか、そのびったりするところに、○印をつけて下さい」というものである。

ここでは、32の対象を「感情価」を基準にいくつかの下位尺度に区分し、各尺対の意味を明らかにしたいと思う。

表1 感情語と対象語

(感情語 -8-)
喜・望・愛・驚・悲・恐・怒・嫌
(対象語 -32-)
私・父・母・夫・妻・兄弟・姉妹・恋人・友人・仲間 ・家族・家庭・親類・近隣・集団・学校・職場・社会 ・人類・文化・仕事・遊び・勉強・生活・芸術・旅・ 健康・病気・生・死・自然・趣味

表10 イメージ調査(その一部)



2. 手 続

(1)32の対象語毎に、8感情語の相関を被験者131について算出し、因子分析の主因子解を求めた。

(2)次に、(1)の結果にもとずき、プラス感情v.s. マイナス感情をあらわしていると考えられた因子の因子負荷量を基準にして、感情語にウエイトづけをし、対象に対する感情の合成点としての「感情価」を求めることとした。こうすることによって、8感情は、プラスv.s. マイナス感情軸上における、対象に対する感情度となり、合成得点としての「感情価」が、プラスv.s. マイナス感情軸上に位置づくことになる(近似的に)。

具体的には、対象jに対する被験者iの「感情価Tij」は、 $T_{ij} = \frac{\sum_{K=1}^8 W_{jk} \times t_{ijk}}{\sum_{K=1}^8 |W_{jk}|}$ として定義されるものである。ここで、Wjkは、対象jに対する感情語Kのウエイトづけであり、(1)によって求めた因子負荷量を少数第3位を四捨五入して第2位までとしたものである。Tijkは、被験者iが対象jをイメージして感情語kとの「近さ-遠さ」を評定した評定

点で、<近い>=+2, <やや近い>=+1, <どちらともいえない>=0, <やや遠い>=-1, <遠い>=-2として数量化したものである。

(3)32対象語間の因子構造(まとまり具合)を明らかにするために、「感情価Tij」により、被験者131により32対象語間の相関行列を求め、主因子解及び固有値1.0以上を基準とするバリマックス解を求めた。

3. 結 果

(1)対象に対する8感情語のウエイトづけは、手続(1)の主因子解の因子負荷量を小数点以下3桁を四捨五入し、小数点以下2桁としたものであるが、その一部を表11に示す。結果は、全体として、「喜」・「望」・「愛」などの感情語をプラスとすれば、「悲」・「恐」・「怒」・「嫌」などの感情語がマイナスとなる対極性を示すという一致した傾向をもつものであったが、因子負荷量は個々の対象語によって、ちがいをもちることがわかる。

(2)表12に表すものが、「感情価」を指標とする32対象についての因子分析(バリマックス解)の結果である。

固有値1.0以上を基準とするバリマックス解は5因子性であったが、各因子に対する因子負荷量を手がかりにし、解釈のしやすさを考えて、32対象のまとまり具合を考えてみると、次のようであった。

第1因子(父・母・夫・妻・兄弟・姉妹・家族・家庭・親類)

第2因子(文化・遊び・芸術・旅・自然・趣味)

第3因子(私・近隣・学校・職場・社会・人類・仕事・勉強・生活)

第4因子(友人・仲間・集団)

第5因子(恋人・健康・病気・生・死)

4. 考 察

表12に示したバリマックス解の結果は、32対象を5つの因子に区分できることを示している。

ここで、それぞれの因子は、第1因子が、

表11 対象に対応する感情語のウエイト (一部)

	喜	望	愛	驚	悲	恐	怒	嫌
私	.56	.65	.42	-.07	-.56	-.70	-.46	-.62
職 場	.76	.43	.56	-.11	-.70	-.55	-.53	-.72
仕 事	.62	.66	.42	.07	-.69	-.52	-.59	-.78
父	.71	.69	.70	.08	-.44	-.14	-.54	-.74
母	.71	.66	.65	-.11	-.29	-.38	-.66	-.76
家 庭	.72	.65	.60	-.25	-.63	-.71	-.68	-.86
集 団	.73	.66	.68	-.22	-.76	-.70	-.66	-.85
文 化	.55	.62	.51	.23	-.50	-.49	-.52	-.59
自 然	.39	.51	.31	-.41	-.35	-.59	-.61	-.43
生	.77	.75	.62	.17	-.44	-.31	-.41	-.63
死	.64	.56	.23	-.44	-.44	-.75	-.34	-.68

表12 32対象の因子負荷量 -VARIMAX解-

		第1因子	第2因子	第2因子	第3因子	第4因子
家族親和性	父	.643	-.020	.168	.113	.023
	母	.645	.285	.188	.163	.171
	夫	.433	.469	.425	.142	.060
	妻	.426	.444	.354	.301	.050
	兄弟	.679	.323	.216	.231	.066
	姉妹	.715	.309	.283	.149	.054
	家族	.704	.332	.287	.289	.282
	家庭	.725	.359	.271	.231	.216
	親類	.556	.116	.342	.275	.065
文化享受性	文化	.269	.584	.346	.356	.046
	遊び	.127	.555	.189	.293	.145
	芸術	.119	.635	.159	.043	.146
	旅	.185	.567	.224	.320	.208
	自然	.182	.422	.211	.271	-.096
	趣味	.248	.863	.140	.090	.197
社会性(脱モラトリアム性)	私	.224	.156	.570	.465	.079
	近隣	.427	.266	.533	.230	.101
	学校	.480	.259	.553	.122	.015
	職場	.272	.205	.726	.189	.029
	社会	.274	.135	.621	-.407	-.063
	人類	.381	.364	.470	.378	.156
	仕事	.245	.326	.744	.163	.033
	勉強	.277	.368	.473	.031	-.104
	生活	.396	.449	.497	.353	.088
集団親和性	友人	.339	.409	.233	.687	.125
	仲間	.400	.379	.224	.637	.163
	集団	.383	.158	.375	.594	-.050
健全性	恋人	.151	.263	.325	.277	.401
	健康	.247	.571	.249	.166	.394
	病気	-.055	-.183	.158	-.016	-.723
	生	.330	.429	.401	.374	.385
	死	-.097	-.060	-.046	-.005	-.738

家族・家庭に関連した諸対象という意味で、諸対象が「家族・家庭イメージ」としてのまとまりをもち、同様に、第2因子は「文化・趣味イメージ」、第3因子は「社会生活のイメージ」、第4因子は、「仲間(集団)イメージ」、第5因子は、「健康な生活のイメージ」としてのまとまりをもっていると考えられる。

ところで、これらの因子は、因子としてのまとまりを構成する諸対象との関連で見ると、各対象の因子負荷量が因子との相関係数であることから、たとえば、「父・母・家族」に対して、プラスの感情イメージを抱く場合には因子もまたプラスの感情イメージを代表するものである。

従って、今、これらの因子を構成する諸対象の「感情価」を合計し、各因子毎の尺度得点とするならば、各尺度(因子)は、それらの尺度(因子)を構成する諸対象に対して抱く、プラスv.s. マイナス感情イメージを代表するものとなる。ここで、プラスの感情イメージは、諸対象に対し、「喜・望・愛」の感情をもっていることであり、マイナスの感情イメージは、諸対象に対し、「悲・恐・怒・嫌」の感情をもっていることである。

このように考えてみると、各因子を、諸対象を代表する感情イメージ尺度としてとらえるならば、

第1因子は、「家庭・家族・父・母」などに

プラスv.s.マイナス感情を抱いていることが、家庭や家族に対して親密さを感じ、そこでの親和に喜びを抱いているそのレベル(程度)を意味しているという意味で、“家族親和性”の尺度と考えることができる。

同様に、第2因子は、「趣味・芸術・文化」にプラスv.s.マイナス感情をもつことが、それらを享受することに喜びを抱いたり、恐れや嫌悪を感じたりすることと関連をもっているという意味で、“文化享受性”の尺度であり、

第3因子は、「仕事・職場・社会」にプラス感情のイメージを抱くことが、長い学生生活に別れをつけ(モラトリアムを脱け出て)社会人としての生活を創りあげる上に重要であるという意味から、“社会性(脱モラトリアム性)”尺度と考えることができ、

第4因子は、「友人・仲間・集団」に対してプラスv.s.マイナス感情を抱いていることを意味するという点から、第1因子と同様にして、“集団親和性”の程度をあらわす尺度と考えることができる。

「病氣・死」などに対して、喜び、望みや愛の感情を抱くことは、その事情については人間的に理解はできるとしても、やはり精神的健全さを示すものであり、それらに対して、また、「健康・生・恋人」などに対し、素直にプラスの感情イメージを抱くことが、やはり、一般的には、精神的健全性を示すものである。その意味から、最後の第5因子は、“精神的健全性”尺度と名づけることができる。

研究Ⅲ：就職・進路とイメージ調査

1. 目的

イメージ調査の32の対象は、5つの因子にまとめられ、それはプラスv.s.マイナス感情の軸上で、“社会性(脱モラトリアム性)”、“家族親和性”、“集団親和性”、“文化享受性”および“精神的健全性”として特徴づけることのできるものであった。

ここでは、『イメージ調査』の上記5尺度と「就職・進路意識」との関連を検討しようと思う。

2. 手続

(1)各尺度毎に、各尺度を構成する諸対象の「感情価」(前出、○P)の合成得点としての尺度得点を算出した。ここで、対象の数 m で構成される尺度 n の、被験者 i の尺度得点 S_{ni} は、
$$S_{ni} = \left(\sum_{j=1}^8 T_{ij} \right) \div m \times 10$$
で定義され、各尺度の尺度得点は、理論値として最高+20点~最低-20点に分布するものである。

(2)(1)で算出した尺度得点によって、「全体」、「性別」、「専修別」、「高校卒年度別」、「就職・進路希望の決定・未決定」、「就職を考えはじめた時期」、「希望業種」、および「希望職種」の平均点を求める。

(3)就職に対する学生の意識(5段階評定)と、各尺度との相関を求める。

3. 結果

3-1. 表13に、「性別」から「希望職種」までの各尺度の平均点を示す。

(1)全体では、“健全性(12.46)”および“文化享受性(11.02)”が高く、“家族親和性(9.69)”、“集団親和性(9.20)”がつづき、“社会性(脱モラトリアム性)(7.11)”の尺度得点の低くなっていることがわかる。

これを、A社(電気部品メーカー、従業員約9,000名)の'82年度入社内定大学卒男子と比べる(表13、参考欄)と、“健全性(12.99)”が最も高く、“社会性(9.12)”が最低となる各尺度の順位は、同様の傾向を示しているが、全尺度とも、人間科学部学生(4年)がA社に比べて低いことがわかる。平均値の差のt検定の結果、5%水準の有意差を示したものは、“社会性(脱モラトリアム性)”(A社との差=1.98)、“家族親和性”(差=1.69)、“集団親和性”(差=1.58)であり、これら3尺度が、A社内定者とのちがいの大きなことがわかる。(図1)。

(2)性別で見ると、どの尺度でも、男が女よりも低い。平均値の差のt検定の結果、5%の有意水準で、“家族親和性”(男8.75 v.s.女10.84)、“文化享受性”(男10.24 v.s.女11.95)に差のあることが認められた。(図1)

表 13 感情イメージ尺度の平均点

区 分		社会性	家族性	集親和性	団性	文享受性	健全性	計	区 分		社会性	家族性	集親和性	団性	文享受性	健全性	計	
全 体		7.11	9.69	9.20	11.02	12.46	9.82		全 体		7.11	9.69	9.20	11.02	12.46	9.82		
(参考：'82. A社内定者)		* (9.12)	* (11.38)	* (10.78)	(11.59)	(12.99)	-		(参考：'82. A社内定者)		(9.12)	(11.38)	(10.78)	(11.59)	(12.99)	-		
性別	男	6.67	8.75	9.19	10.24	11.92	9.07		希望業種 (第一希望)	民間企業	7.31	9.50	9.23	12.15	12.87	9.84		
	女	7.61	*10.84	9.22	*11.95	13.07	10.58			公務員	6.04	9.68	9.58	10.15	11.93	10.09		
専修別	心理学	5.92	9.67	7.15	10.27	12.45	9.00			教 員	8.43	11.26	11.16	11.21	13.34	10.81		
	社会学	7.44	9.19	10.40	11.56	12.43	10.13			福祉等非営利	5.42	7.92	6.21	10.14	12.23	8.00		
	教育学	* 8.23	10.42	*10.68	11.83	13.00	10.70			大 学 院	7.25	7.00	3.80	8.80	10.80	8.00		
	人間学	7.09	9.18	9.49	10.83	11.91	9.69			不 明	9.33	10.33	8.67	12.00	10.67	10.33		
高校 卒年	S 55 以前(浪人)	6.48	8.68	8.56	9.91	11.02	9.06			希望職種 (第一希望)	営業・販売関係	6.33	8.67	7.67	12.00	13.00	9.00	
	S 56 年(現役)	7.62	10.32	9.56	*11.63	*13.21	10.30				事務関係	6.68	10.91	11.63	10.91	11.95	10.84	
就職進路 決まっているか	決まっている	* 8.11	10.15	9.71	10.93	12.85	10.35				技術関係	5.00	6.33	7.67	11.33	10.33	8.00	
	決まっていない	6.14	9.19	8.88	11.07	12.07	9.33				サービス関係	3.85	5.92	6.71	11.07	13.21	7.33	
就職を考えはじめた時期	中学時代から	8.33	10.17	8.50	10.67	10.33	9.50		マスコミ関係		8.30	9.70	9.60	11.30	12.30	10.10		
	高校受験時から	9.00	10.67	14.00	12.75	10.00	10.00		教 員		8.43	11.26	11.16	11.21	13.34	10.81		
	高校在学中	10.00	11.31	12.08	11.50	14.15	12.64		心理関係専門職		7.25	9.56	4.60	10.30	13.00	9.50		
	大学入学時点	6.94	9.25	9.00	10.69	12.26	9.23		福祉関係専門職		8.23	10.57	10.86	11.50	12.57	10.38		
	最近になって	7.07	9.93	9.22	11.48	12.93	10.31		研究職(大学・研究所)		7.33	7.00	6.67	9.33	8.00	7.67		
	まだ具体的でない	0.50	4.67	3.17	7.00	7.33	4.33		そ の 他		7.00	7.75	6.75	9.00	9.25	9.00		
	全く考えていない	5.00	7.00	- 8.00	5.00	13.00	6.00		職種はなんでもよい		7.00	5.00	7.00	9.50	13.00	7.50		
								決められない	6.60		10.60	5.20	14.25	14.00	11.00			

(注) *有意水準 5%

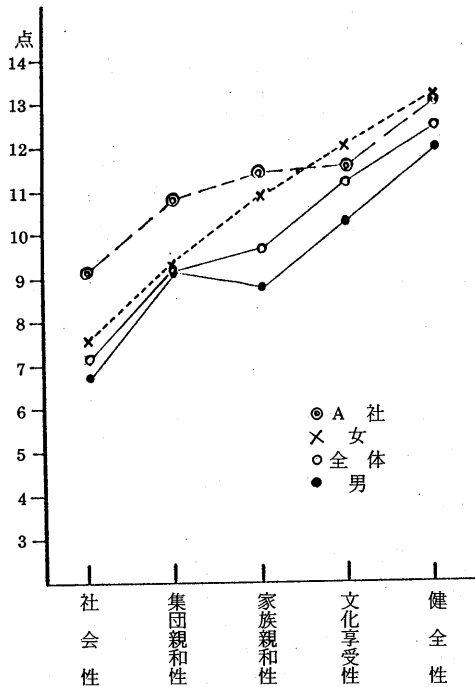


図1 全体・性別およびA社

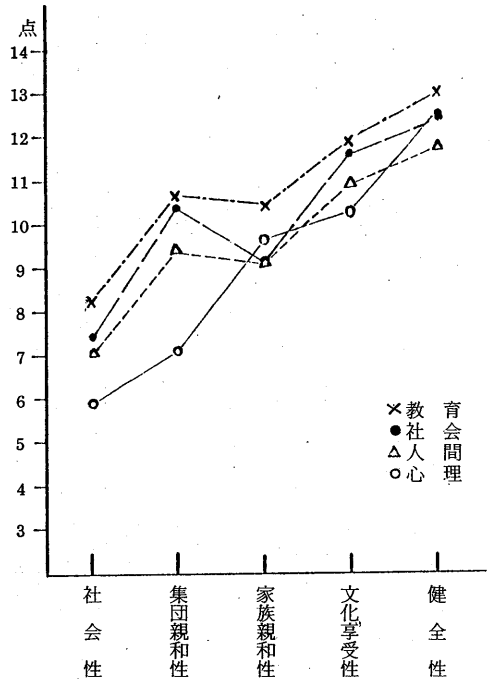


図2 専修別

(3)専修別では、教育学専修がどの尺度得点でも最高であった。各尺度の最低を見ると、「社会性」(5.92)、「集団親和性」(7.15)、「文化享受性」(10.27)では心理学専修が最低得点であり、「家族親和性」(9.18)、「健全性」(11.91)では人間学専修が最低であった。社会学専修は「家族親和性」(9.19)が人間学専修と同じように低い。各尺度の最高と最低の差についての検定の結果、5%水準で有意差がみられたものは、「社会性」(教育8.23 v.s. 心理5.92)および「集団親和性」(教育10.68 v.s. 心理7.15)であった。(図2)

(4)高校卒業年度のS55年以前(浪人)とS56年度(現役)を比較すると、すべての尺度でS56年(現役)の方が高得点を示した。このうち、t検定で5%水準の有意差の認められるものは、「文化享受性」および「健全性」であった。

(5)就職・進路希望の決定と未決定の比較では、どの尺度も「決定」の方が尺度得点の高いことがわかる。平均値の差のt検定で5%

水準で有意差の認められたものは、「社会性(脱モラトリアム性)」(決定8.11 v.s. 未決定6.14)であった。(図3)

(6)就職を考え始めた時期で見ると、「社会性(脱モラトリアム性)」および「家族親和性」において「高校在学中以前」が「大学へ入学した時点以後」に比べ高いこと。「集団親和性」では、「中学時代から(8.50)」は「大学への入学時点から(9.00)」よりも低い。これを除くと、「高校在学中(12.08)・高校受験時から(14.00)」の方が高く、それ以後の方が低いことがわかる。

また、「文化享受性」では「まだ具体的でない(7.00)」と「全く考えていない(5.00)」が低く、「健全性」では「まだ具体的でない(7.33)」が低いという特徴があるが、この2つの尺度には、就職を考え始めた時期の早い遅いには一貫した傾向は見られない。

(7)希望職種について「大学院」希望および「不明」を除いてみると、「社会性(脱モラトリアム性)」尺度では、

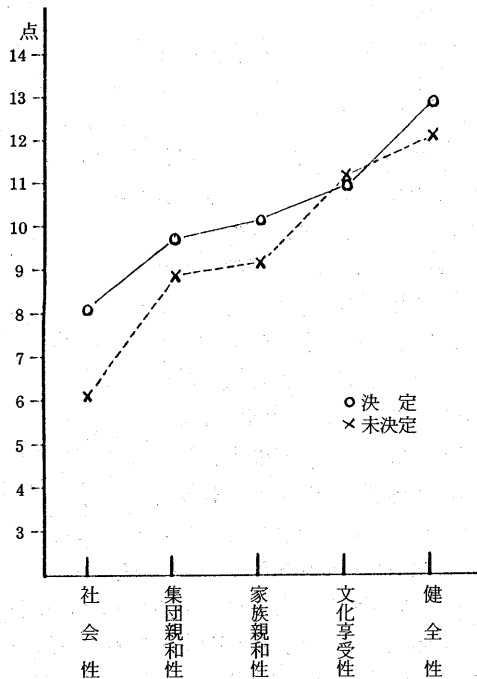


図3 就職・進路希望の決定 V.S. 未決定

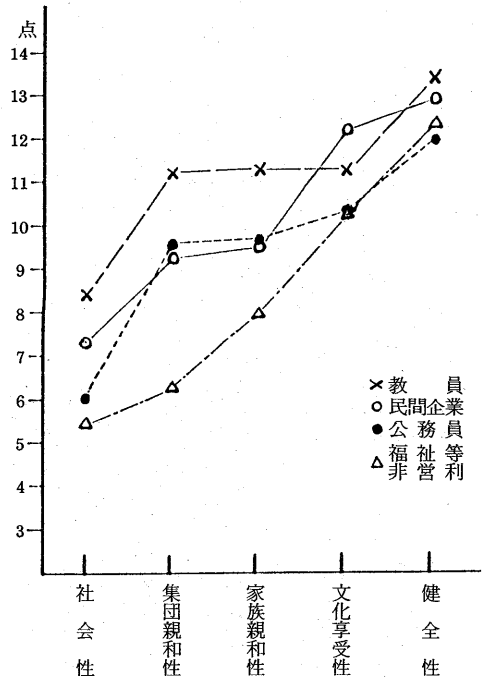


図4 希望業種別

「教員 (8.43)」が相対的に高く、ついで「民間企業 (7.31)」であり、「公務員 (6.04)」および「福祉等非営利 (5.42)」が高くなっている。

「家族親和性」および「集団親和性」では、「教員 (11.26 および 11.16)」の高いことは「社会性」と同様であるが、「民間企業 (9.50 および 9.23)」と「公務員 (9.68 および 9.58)」では、「教員」に比べ、かなり低くなり、「福祉等非営利 (7.92 および 6.21)」では、ずっと低くなっていることがわかる。

「文化享受性」は、「民間企業 (12.15)」が最高で、ついで「教員 (11.21)」となり、「公務員 (10.15)」および「福祉等非営利 (10.14)」が最低である。

「健全性」は、「教員 (13.34)」 「民間企業 (12.87)」 「福祉等非営利 (12.23)」 「公務員 (11.93)」 の順であるが、最高と最低の差は 1.41 であまり大きくない。(図4)

(8) 希望職種についてみると、

「社会性 (脱モラトリアム性)」では、「教員 (8.43)」 「マスコミ関係 (8.30)」 および

「福祉関係専門職 (8.23)」が高く、逆に「技術関係 (5.00)」 「営業・販売関係 (6.33)」 「事務関係 (6.68)」 および「決められない (6.60)」が低い。

「家族親和性」では、高いものは「教員 (11.26)」 「事務関係 (10.91)」 「決められない (10.60)」 および「福祉関係専門職 (10.57)」であり、低いものは「職種はなんでもよい (5.00)」 「サービス関係 (5.92)」 および「技術関係 (6.33)」であった。

「集団親和性」では、高いものは「事務関係 (11.63)」 「教員 (11.16)」 および「福祉関係専門職 (10.86)」であり、低いものは「決められない (5.20)」 「心理関係専門職 (4.60)」 「サービス関係 (6.71)」 および「研究職 (6.67)」であった。

「文化享受性」では、最も高いのは「決められない (14.25)」であったが、「職種は何でもよい (9.50)」 「研究職 (9.33)」 および「その他 (9.00)」の低いことを除いて、他の職種間には差がなく、おおむね11点を中心とするも

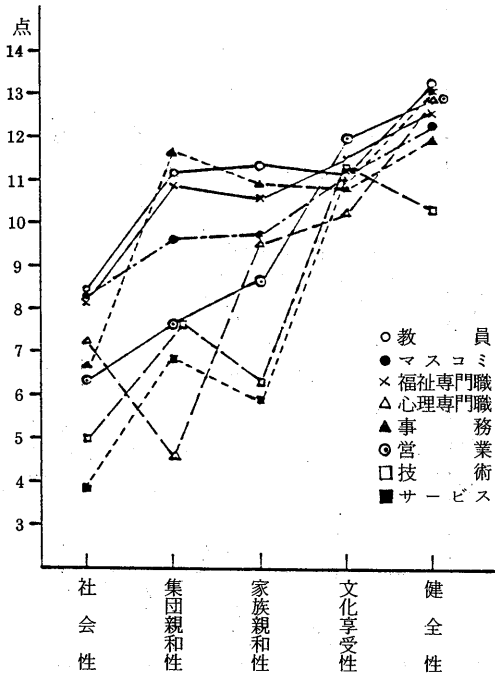


図 5 希望職種別

のであった。

“健全性”では、最も高いものが“文化享受性”と同様に「決められない(14.00)」とする者で、逆に最も低いのは「研究職(8.00)」および「その他(9.25)」であった。「技術関係(10.33)」も相対的に低いが、その他の職種は、おおむね12点を中心とするものであった。(図5)

3-2. 表14は、「就職に対する学生の意識」(5段階評定)と各尺度との相関係数を求めた結果で、 $r > |0.20|$ のものを示したものである。

(1) “社会性”は、「就職を考えたとき(快-不快)」と0.346, 「専門科目は職業に生かせるか」と0.345, 「自分の能力発揮と自己実現のため(働く)」と0.308の相関を示し、これらはいずれも0.1%水準で有意であった。また, 「就職情報誌を見るか」とは0.267, 「社会のためになるから(働く)」と0.259, 「新聞の求人広告欄を見るか」と0.235, 「職業・進路適性の理解」とは0.227の相関を示し、これらは1%水準の有意差を示した。

表14 感情イメージと就職に関する意識との相関

就職に関する意識		感情イメージ尺度				
		社会性	家族親和性	集団親和性	文化享受性	健全性
問7 問10 就職に関して	10-a 職業・進路適性の理解	*.227		***.293		
	7-b 就職を考える時(快-不快)	***.346		*.218		
	7-a 就職について深く考えるか(深-浅)			*.213		** .287
	10-b 就職・進路での親の意見の尊重		*.259			*.242
	7-c 就職は人生で重要か		*.218			***.320
	10-c 新聞の求人広告欄を見るか	*.235				.207
	10-d 就職情報誌を見るか	*.267	*.235	*.238		** .278
	10-e 専門科目は職業に生かせるか	***.345	*.249			
	10-f 就職・進路で文科でよかったか	** .268				
問8 何のために働くか	a 自分の能力発揮と自己実現のため	***.308				
	d 社会のためになるから	*.259	.204	** .288		
	c 収入を得るため					
	f 食べるためには仕方がない	* -.216				
	e 人間の義務だから仕方がない					
	g 皆が働くので働く					
	b 働くことで偉くなるため					

(注) 有意水準 * 1%, ** 0.1%, *** < 0.1%

(2) "集団親和性" は、「職業・進路適性の理解」と0.293、「社会のためになるから(働く)」とは0.288の相関をもち、これらは0.1%水準で有意であり、「就職情報誌を見るか」とは0.238、「就職を考える時(快-不快)」とは0.218、「就職について深く考えるか」と0.213の相関を示し、これらは、1%水準の有意性を示した。

(3) "家族親和性" は、0.1%水準の有意性を示すものはなかったが、1%水準の有意性を示すものは、「就職・進路での親の意見の尊重」と0.259、「専門科目は職業に生かせるか」と0.249、「就職・情報誌見るか」と0.235、「就職は人生で重要か」との0.218の相関であった。

(4) "文化享受性" では、1%水準で有意な相関を示すものは見られなかった。

(5) "健全性" では、「就職は人生で重要か」との間に0.320、「就職について深く考えるか」とは0.287、「就職情報誌見るか」と0.278の相関があり、これらは、0.1%水準で有意であった。また、「就職・進路での親意見の尊重」と0.242の相関があり、これは、1%水準の有意性を示した。

4. 考 察

就職・進路の問題においては、「就職・進路の希望」をまず具体的に決めていることが、重要であることは、すでに述べた。

この点に関して、表13は、「就職・進路希望」の「決定」と「未決定」に5%水準で有意な差を示すものが、「社会性(脱モラトリアム性)」であることを示していた。「社会性(脱モラトリアム性)」得点の高い者が、「就職・進路希望」を「決定」しており、低いものは、「未決定」のことが多いということである。また、5%水準での有意性はもたないが、「集団親和性」および「家族親和性」も、「決定」者が高く、「未決定」者が低くなっており、これもまた、「就職・進路希望」の「決定」「未決定」に関わっていることを示していた。

ところで、研究1では、「就職・進路希望の決定」に関する要因として、「就職を考えはじ

める時期」が重要であり、「就職に対する学生の意識」の「自分の職業・進路適性の理解」「自分の就職について深く考えているか」「就職について考えるとき快か不快か」「専門科目が職業に生かせるか」および「就職は人生において重要なことだと思うか」が重要であることが明らかにされていた。

表13で「就職を考え始める時期」とイメージ調査の各尺度との関連をみると、「社会性(脱モラトリアム性)」、「家族親和性」および「集団親和性」得点の高いのは、就職を早くから考えた者であり、「大学への入学時点から」以降の者では低く、これら3つの尺度が、「就職・進路希望」の決定にかかわっていることが示されている。

また、「就職に関する学生の意識」との関連を表14で見ると、「職業・進路適性の理解」および「就職を考えるとき快か不快か」が「社会性」および「集団親和性」と、「就職について深く考えるか」が「集団親和性」および「健全性」と、そして、「就職は人生で重要か」が「家族親和性」および「健全性」と、それぞれ1%水準の有意な相関をもっていることが示され、「社会性(脱モラトリアム性)」および「集団親和性」が「就職・進路希望」の決定と関連をもつことがわかる。

以上から、全体としていえることは、就職・進路の問題を考えるとき、「社会性(脱モラトリアム性)」および「集団親和性」のレベルがどういう現状にあるかということの重要性である。就職するということは、モラトリアム期間である大学生活に別れをつけ、社会人として労働集団の中に入り、そこでの人間関係をつくり上げなくてはならないのであるから、当然のことである。

(1)上記の「社会性(脱モラトリアム性)」および「集団親和性」のレベルによって、考えると、表13の結果から、A社内定者と人間科学部学生(4年)とでは、「社会性」および「集団親和性」に5%水準での有意なちがひが見られていた。人間科学部の学生は、現状のままでは、A社レベルの会社には入社する

ことが難かしいと言えそうである。

(2)専修別にこの点を見ると、教育学・社会学・人間学専修の順にそのレベルは下がっているが、この3専修には、あまり大きな差はないことがわかる。しかし、心理学専修では他の3専修に比べ、“社会性(脱モラトリアム性)”および“集団親和性”のレベルがずっと下がっており、心理学専修を選択した学生の就職意識に問題のあることが示されている。

(3)希望業種別にこれを見ると、「教員」希望者では、“社会性(脱モラトリアム性)”も“集団親和性”も高く、A社内定者の水準にあることがわかる。

これに対して、民間企業希望者は、教員に比べても、またA社内定者に比べても、“社会性(脱モラトリアム性)”も“集団親和性”も省り、このままでは、就職にかなりの困難性のあることが示されている。

また、公務員希望者では、“集団親和性”では民間企業希望者に同レベルであるが、“社会性(脱モラトリアム性)”では、かなり劣り、民間企業希望者以上に、就職の困難性の高いことが推察される。

そして、福祉等非営利を希望する者は、“社会性”および“集団親和性”のいずれにおい

ても、そのレベルが低く、就職に対する準備性に欠けているといえそうである。彼等は、就職・進路希望として福祉等非営利をあげてはいるが、「まだ就職したくない。まだ学生生活のままがいい」というのが本音であるように思われる。

(付) 本研究における『就職・進路に関する意識調査』票は、文教大学人間科学部1983年度心理学特殊研究上杉ゼミ(前期)に参加した学生諸君と共同で作成したものである。記して感謝したい。

文 献

水島恵一、「体験と意識」研究の方法論、体験と意識に関する総合研究第1集、文教大学人間科学研究会、1-8、1979

上杉喬・佐々木正宏、カード式投影法による感情因子の基礎研究、体験と意識に関する総合研究第1集、文教大学人間科学研究会、14-16、1979

上杉喬、感情イメージの研究、人間科学研究第3号、22-38、1981

上杉喬、感情イメージの研究(Ⅱ)-労働場面における感情イメージ、人間科学研究第4号別冊、29-40、1983

(1984年9月28日受付)

(付表) 就職・進路に関する意識調査

就職・進路の問題は大学生生活の締め括りとして、重要です。また、最近の就職難の世相からも、この問題にはやくから具体的に取り組むことが必要になってきています。そこで私達は、新4年生の就職・進路についての考えを調査し、これからの就職・進路指導についての資料として活用したいと思い、今回このような調査を行なうことにいたしました。

この調査結果は、コンピュータによる統計処理を行ないますので、あなたの回答が外部にもれたりすることはありません。また、この調査は就職・進路指導のためのものですので、「このように感じなければならない」というたてまえではなく、事実・自分の考えなどをありのままにお答えくださるようお願い致します。

文教大学 人間科学部 人間科学科 就職対策委員会

心理 上杉
 社会 勅使河原
 教育 角田
 人間 金子

それでは下の□の中を記入し、次ページの問1から順に回答して下さい。

昭和59年 月 日実施			
所属:	学部	(学科・課程)	年
年齢:	満	才	
性別:	男	・	女
学籍番号:	HH	-	氏名:

問1 何年に高校を卒業されましたか。あてはまる箇所○印をつけて下さい。

- a. 昭和54年度
- b. 昭和55年度
- c. 昭和56年度
- d. 昭和57年度
- e. その他()

問2 あなたの大学選択の基準は以下のどれにあたりますか。最もあてはまる箇所○印をつけて下さい。

- a. 学校の知名度
- b. 学校の雰囲気
- c. 偏差値
- d. 勉強したい学部がある
- e. 周囲の人の意見(教師、親)
- f. 地理的条件(通学に便利等)
- g. 就職を考えて
- h. その他()

問3 今現在、具体的に希望する就職・進路先が決まっていますか。あてはまる箇所○印をつけて下さい。

- a. はい
- b. いいえ

aの「はい」と答えた方で、おさしつかえなければ、具体的に就職・進路先名をお書きください。

[]

問4 あなたは何等かの“コネ”を持っていますか。

- a. たくさん持っている
- b. 一つくらいなら持っている。
- c. 全く持っていない

問5 いつごろから、自分の就職について真剣に考え始めましたか。あてはまる箇所に○印をつけて下さい。

- a. 高校受験の時から
- b. 高校に在学している時から
- c. 大学に入学した時点で
- d. 最近になって初めて具体的に
- e. 中学時代から
- f. まだ具体的に考えていない
- g. 全く考えていない

問6-1 あなたの希望する業種(進路)はなんですか。1)~43)のうちで、あてはまる箇所に3つまで○印をつけて下さい。第1希望は、◎でお願いします。

<希望する業種>

- a. メーカー
 - 1)食品 2)化学 3)繊維 4)鉄鋼 5)自動車
 - 6)機械 7)電気機器 8)その他
- b. 建設
 - 9)建設 10)設計事務所 11)設備工事関係
- c. 商社
 - 12)総合商社 13)専門商社
- d. 流通産業
 - 14)スーパー 15)デパート 16)ファッション 17)その他
- e. マスコミ
 - 18)新聞 19)放送 20)出版
- f. 金融
 - 21)銀行 22)信用金庫 23)損害保険
 - 24)生命保険 25)証券

<次の頁につづく>

- g. レジャー産業
 - 26)観光 27)旅行 28)娯楽施設 29)ホテル 30)食堂
- h. 情報産業
 - 31)コンピューター関係 32)広告・宣伝 33)調査研究
- i. その他企業
 - 34)不動産 35)運輸 36)電気・ガス・水道 37)その他
- j. 官公庁など
 - 38)国家公務員 39)地方公務員 40)団体職員
- k. 教員など
 - 41)幼稚園・保育園 42)小学校教員 43)中・高校教員
 - 44)養護教員 45)福祉施設関係 46)社会教育関係
 - 47)病院 48)大学院 49)その他
- l. 不明
 - 50)不明

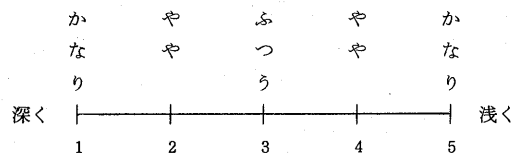
問6-2 あなたの希望する職種(進路)はなんですか。a~iのうちであてはまる箇所に2つまで○印をつけて下さい。第1希望は、◎でお願いします。

<希望する職種>

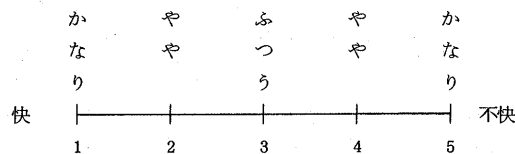
- a. 営業・販売関係の仕事
- b. 事務関係の仕事
- c. 技術関係の仕事
- d. サービス関係の仕事
- e. マスコミ関係の仕事
- f. 教員
- g. 心理関係専門職
- h. 福祉関係専門職
- i. 研究職(大学・研究所など)
- j. その他
- k. 職種はなんでもよい
- l. 決められない

問7 下記にあげる項目について、あてはまる箇所には○印をつけてください。

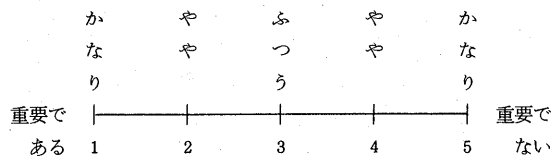
a. あなたは、現在、自分の就職について深く考えていますか。



b. 就職のことについて考えるとどんな気持ちになりますか。

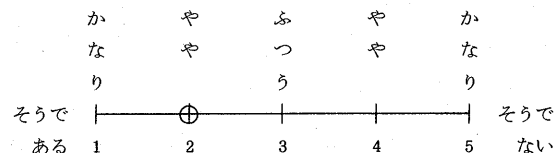


c. 就職は人生において重要なことだと思いますか。

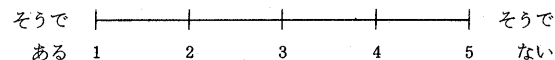


問8 あなたは、何のために働きますか。下記にあげる a~g の項目について、あてはまる箇所は例のように○印をつけてください。

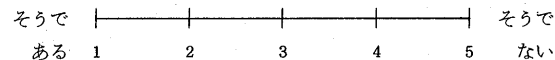
(例) 親のため



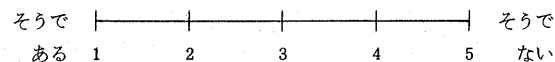
a. 自分の能力の発揮と自己実現のため



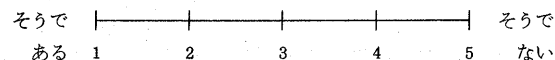
b. 働くことによって、えらくなるため



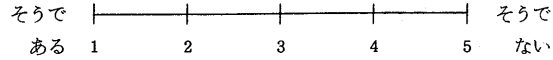
c. 収入を得るため



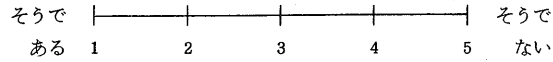
d. 社会のためになるから



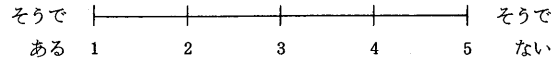
e. 人間の義務であるから仕方がない



f. 食べるためには仕方がない

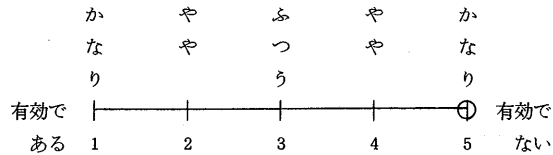


g. みんなが働くので働く

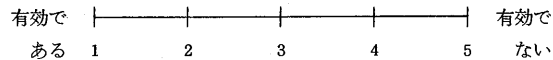


問9 就職の手段として以下の項目は、有効と思われますか。下記にあげる項目について、あてはまる箇所例のように○印をつけてください。

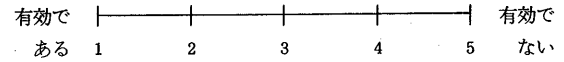
(例) お金



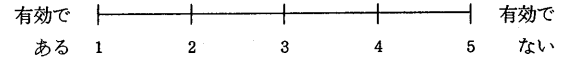
a. 学科の成績



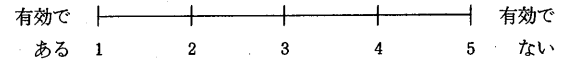
b. 会社訪問



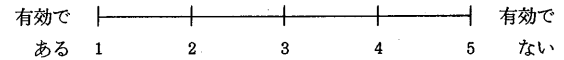
c. コネ



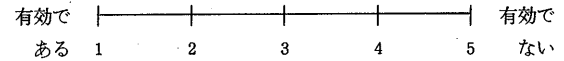
d. 個性(性格)



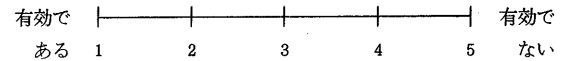
e. 資格(珠算、簿記、情報処理、運転免許など)



f. 容姿



g. サークル活動(体育系サークル)



h. サークル活動(文化系サークル)

有効で
ある 1 2 3 4 5 有効で
ない

i. その他

()

問10 下記にあげる項目について、あてはまる箇所に例のように○印をつけてください。

a. あなたは、自分の職業・進路適性を理解していると思いますか。

理解し
ている 1 2 3 4 5 理解し
てない

b. あなたは、就職・進路に関して、親の意見を尊重しますか。

尊重
する 1 2 3 4 5 尊重し
ない

c. 新聞・雑誌等の求人広告欄を見ますか。

見る 1 2 3 4 5 見ない

d. 就職活動に関する情報誌(ex. リクルート・ダイヤモンド)を見ますか。

見る 1 2 3 4 5 見ない

e. 現在、自分の学部で勉強(専門科目)していることがあなたのつきたい職業に生かせると思いますか。

思う 1 2 3 4 5 思わ
ない

f. 今、あなたが就職・進路活動について考えた場合、人間科学部に入ってよかったと思いますか。

よかつ
た 1 2 3 4 5 よくな
かった

—— 御協力ありがとうございました ——